

氏 名 米山 知子

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1084 号

学位授与の日付 平成 19 年 9 月 28 日

学位授与の要件 文化科学研究科 比較文化学専攻
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 「場」と「パフォーマンス」に関する人類学的研究
—トルコ・都市におけるアレヴィーのセマーを例として—

論文審査委員 主 査 准教授 福岡 正太
教授 西尾 哲夫
准教授 寺田 吉孝
名誉教授 小柴 はるみ（東海大学）

論文内容の要旨

本論文の目的は、トルコ共和国のアレヴィーと呼ばれる人々が本来儀礼の中で実践してきた身体技法セマーと、1950年代以降のトルコ社会の変化をきっかけに多様化する、都市イスタンブルにおけるセマー実践の「場」に焦点を当て、セマーの現代都市での役割をパフォーマンス研究および人類学的視点から考察し、更にそこから、パフォーマンスとそれが行われる場の関係性を明らかにすることである。本論文執筆のための調査は、主にトルコ共和国イスタンブルで2003年から2007年にかけての計5回、のべ1年3ヶ月行った。

序章では、先行研究を検討し、本論文の位置づけを提示した。まず、セマーを狭義の舞踊 dance とは捉えず、アレヴィーの世界観を記憶した身体技法と捉え、本論文における分析概念としてのパフォーマンスの位置づけを提示した。とくに、従来のパフォーマンス研究では十分に検討されてこなかった、パフォーマンスとそれが実践される「場」の関係という視点が、セマー研究にとって重要であることを指摘した。本論文における「場」とは、様々な要素が時間と共に構成される「空間」、イスタンブルなど「地理的場所」、そしてセマーが実践される「コンテクスト」の3つの意味内容から成る。また、近年増加しているアレヴィーおよびセマー研究は、一枚岩的にみられがちであったアレヴィーのセマーを、ミクロ・マクロ両視点から捉え動的に描き出している。本論文もそのような視点に立つが、より生きたセマー（アレヴィー）を描き出す。

第1章では、近年増加しているアレヴィー研究に準拠して、アレヴィーの信仰・歴史を概観し、続いてセマーの概要を記述した。アレヴィーは、長い歴史の中で独自の文化を育んできたが、その過程で多数派であるイスラーム教スンニー派の人々からは、宗教実践の差異を理由に異端視されてきた。その例が、男女一緒に行われる儀礼ジェムであり、ジェムの構成要素の一つで信仰心の表れとされるセマーである。アレヴィーは、政教分離を国是とするトルコ共和国建国以降においても、宗教的支配構造から脱却することのできないトルコの政治的動向に常に翻弄されてきた。そのようなスンニーとの葛藤の中で、セマーはアレヴィー自身によって世俗化、平等主義を特徴とするアレヴィー性の象徴として表象されるようになった。

第2章では、1950年代以降の都市への移住によって、それまでのアレヴィー共同体とは異なるシステムが形成された経緯を述べた。その中心は、相互扶助やアレヴィーの信奉する聖者の廟、彼らの残した文化の保持を目的に活動を行う「アレヴィー文化協会 *dernek*」である。アレヴィー文化協会では、都市での様々な「不安」を解消するための活動が行われており、そのひとつが「セマー教室」である。都市において、セマーが第三者によってトルコ文化（民俗舞踊）の一つとして切り取られることになり、セマーは「信仰」の表れであり、「舞踊」ではないというそれまでのアレヴィーの価値観が変化することになった。そうして、協会およびセマー教室の生徒によって、アレヴィーの象徴であるセマーはいくつもの実践の「場」を形成することになり、セマーはそれを取り巻く一般トルコ社会に提示されている。

第3章では、以上の経緯を経て生成されたいくつものセマー実践の「場」を、身体技法としてのセマーとそれが行われるコンテクストという観点から、(1) 儀礼、(2) セマー教室、(3) 公演、(4) 商品としてのセマー（映像作品）、(5) それ以外、の5つに分類し、

それぞれの場におけるセマーチュおよび参加者の身体動作ややり取りを記述した。そこでは、アレヴィーとトルコ社会の相互作用が絶え間なく行われており、続く第4章で、アレヴィーがセマーを「現在のアレヴィーの象徴」として提示するために、そのような相互作用の結果生み出した仕掛けを明らかにした。

まず前提として、身体技法セマーを実践する担い手の身体と彼らの意識が存在する。それらを取り巻き浮かび上がらせるために、場におけるモノの配置と諸レベルでの言説がセマー・パフォーマンスを構成しており、現在の都市のセマーは、それらなしでは成り立たない。さらに担い手の語りからは、セマーが立ち現れる時空間には、そこにいる参加者はそれまで属していた構造から一時的に解放されていることが浮かび上がった。その時、様々な情報が幾重にも重なっている彼らの思考の中には、「現在のアレヴィーのセマー」という存在が組み込まれる。多様化するセマー実践の場に対する評価はどうか、そのような経験を経てセマー（アレヴィー文化）を記憶する人、つまり、いつかセマー（アレヴィー文化）を観た（経験した）という記憶を呼び醒ます可能性を秘めた人を増加させることが、現在のアレヴィー文化協会の意図するところなのである。

以上の考察のもと終章では、まず現代都市におけるセマーとセマー実践の場の役割を検討し、続いて、パフォーマンスとそれが実践される場の関係を明らかにした。セマーと様々な仕掛けが施されたセマー実践の場は、現在のアレヴィーにとって自省の場となっており、さらに「アレヴィー」という存在がトルコ社会で存続していくための重要な場である。また、トルコ都市社会でセマーはそれまでの「信仰」とは異なるアレヴィー世界の生産の場として機能しており、全体社会との間の異質性を調節する緩衝装置の役割を果たしている。

さらに、アレヴィーのセマーがパフォーマンスとして成り立つためには、トルコの都市という地理（社会）的条件の下に生まれた身体技法とともに、当事者たちが身体技法を媒介に自分達を取り巻く社会との相互作用の結果捻出した指標としての様々な「仕掛け」、つまり「パフォーマンス的な行為やモノ」が必要となってくる。さらにパフォーマンスは、身体技法が置かれている「地理的场所」、その地理的场所を取り巻く「コンテクスト」、地理的场所とそれぞれのコンテクストの中で実践者が生みだした様々な仕掛けが織り成す「時空間」から成る「場」に置かれることによって、可視化され、観るものの眼前に出現する。したがって、「パフォーマンス」はそれら「場」を構成する三要素と重なり合って成立するものであり、場とパフォーマンスは一体のものと言うことができるのである。あるパフォーマンス、とくに当事者のアイデンティティの発現形態としてのパフォーマンスを考察する際は、それが実践される「場」にも注意を向けなければならない。

今後は、アレヴィー文化協会を取り巻く社会、つまり、スンニーの人々や全く協会の活動に関心のないアレヴィーたちの、セマー実践に対する意識や関わりや度合いを検討する必要がある。そうすることによって、トルコ社会におけるセマーの役割やセマー実践（パフォーマンス）の場が広範囲に浮かび上がり、場とパフォーマンスの関係性もより多角的に捉えることができると考える。

論文の審査結果の要旨

本論文は、トルコのアレヴィーが演じるセマーを取り上げ、都市におけるその実践の場の多様化とそれに応じたパフォーマンスのあり方を手がかりに、現代トルコの都市におけるアレヴィー文化の動態を明らかにする。トルコにおける宗教的マイノリティであるアレヴィーは、多数派のスニーから異端視され差別・迫害の対象となってきた。彼らの信仰の中核をなす儀礼はジェムとよばれ、そこで演じられるセマーは、音楽にあわせて歩くことと旋回することを基本とし、神への奉仕（イバーデット）として位置づけられてきた。都市に移住したアレヴィーは、迫害を恐れて自らの信仰を隠したが、マイノリティに対する抑圧的政策が緩和された 1990 年代以降、セマーを演じる新しい場が出現した。この論文は、こうした新しい場におけるパフォーマンスを仔細に検討し、セマーの実践がアレヴィーの自己の存在確認や都市社会への適応の試みとなっていることを見事に描きだした。

論文は 6 章から成る。序章では、先行研究を検討しながら、本論文で準拠する「パフォーマンス」と「場」概念の解説をおこなった。第 1 章でアレヴィーの歴史、信仰、およびセマーの宗教的位置づけについて概説したあと、第 2 章では、イスタンブルに移住したアレヴィーが文化協会を設立し、セマー教室を開設した経緯を述べ、カラジャ・アフメット協会におけるセマーについて詳説している。第 3 章では、アレヴィー文化協会によるセマーのパフォーマンスを、1) 儀礼ジェム、2) セマー教室、3) 各種イベント、4) 商業的映像媒体、5) その他の 5 つの場に分類し、それぞれの場におけるセマーの実践とその特徴を分析している。第 4 章では、多様化するセマー実践の場相互の関連に焦点をあて、セマーが儀礼以外の場におかれるようになったプロセスを明らかにした。この過程において、セマーを神への愛の表れとして捉えるアレヴィーの意識にも変化が現われ、セマーは「舞踊」か「信仰」かという解釈の葛藤の中におかれていることが論じられた。終章では、これまでの議論のまとめと今後の課題が述べられた。

トルコの政治的理由により、アレヴィーの調査には様々な制約があることが知られている。このような困難の中で、周到な調査と緻密な民族誌的記述を行った本論文は、アレヴィー研究に大きく貢献するものである。また、都市に移住したアレヴィーによるセマーの実践が、信仰に基づく行為であると同時に、上記のような場の広がりとともに、自己と他者の双方に対してアレヴィー文化を象徴するパフォーマンスとしても位置づけられていく過程の分析は、「伝統文化」の創造の議論にも寄与するところが大きい。また、パフォーマンスを少数派と多数派の共生に向けた活動として位置づけ、その役割を動的に分析している点は、パフォーマンスを文化交渉の場ととらえる視点の有効性を具体的に示しており、高く評価することができる。

ただし、分析のための概念として提示されたパフォーマンスと場については、具体的な場における議論は十分になされているが、それを理論化・一般化するまでにはいたっていない。また、当事者の言説や行動をもっと丹念に記述することで、さらに議論の説得性を増すことができただろう。

しかしながら、これらの課題は本論文における主張の妥当性を損なう性質のものではない。全体的にみれば、本論文はアレヴィー研究の発展に資する重要な成果であるだけでなく、都市的状况の中で複数文化の共存を可能にするためのマイノリティ研究、ディアスポ

ラ研究としても、学術的に高い意義を有しており、博士論文として妥当であると判断した。